和歌古語源秘抄
地
戊弟十三号
二冊之内
伊地知文庫
文庫20
325
2

文庫20
325
2

魁春洞
藏書章

伊地知氏書冊

正風雅抄

千載集

才一 春奇上

春の夜の朧月夜のうちもうるはしき花をうれ
十首奇人なるを也侍りし名所花の奇とてよみある
みすの花の出るうしろ姿なるをみれいとしの
牙之夏歌
拾政右大臣の詠れ奇合ふ郭公の奇とてよみある
立ぬるゝ夜ぬれ袖花の下ゝ夜声ハ松よりの花して
夏れ奇の中ふ

定家卿化

東京帝国大学

六月ばかりまでのうちに春宮の御人
いろとりどりやうつくしき月とみるにたがふる夏れられば

第四秋歌上

八重葛さしこりうゑ芝生にいそぐ秋はきてぬる
ゆふされば野べの秋風身にしみてうづらなくなり
石ゐ間水のこゑもうとくてきよ殿門よりそをる月かな

第五秋歌下

ゆとうもる石間の月をかりの出の歌とてよみ
侍りける

うらもなくふるもしらぬ秋はれるゆふ

秋の月とてよめる

ちぎれゆく方もしらぬ雲のうへにのがるるなりけり

第六冬歌

冬ゆくは一よ二よばかりなれ雪ワけの雲のところせき迄

崇徳院御百首の時歌ふかき所とてよめる

ふるさとの木の枝ばかり高くしてのこりすくなき
雪の山路

法性寺入道前関白百首歌たてまつる時冬の
歌とてよめる

ちりはてぬまがきの菊の残りの花なりけりやうやく今月のうけば

後京定家

頃歟の冥土路の冬ふかう[illegible]
月高き氷のうへなる[illegible]

第七敷島奇

石首歌よみ侍りける時[illegible]
[illegible]

第八羇旅奇

[illegible]
[illegible]

第十賀奇

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

第十一

同家の石首奇よみ侍りける時[illegible]
よみ侍りける

[illegible]

[illegible]

第十二哀二

なりにまゝ[illegible]

第十三題

法性寺殿[illegible]月供花[illegible]のこゝろを歌よみ侍る

[illegible]

第十四題

[illegible]の[illegible]市ふる[illegible]民の[illegible]

[illegible]政[illegible]の[illegible]

[illegible]

第十五題

ぬく山の[illegible]花ぬふい[illegible]花[illegible]

[illegible]

定家

[illegible]

第十六雜[illegible]上

山家の月といふ[illegible]侍る

[illegible]山[illegible]限[illegible]月の[illegible]

殿[illegible]院[illegible]人[illegible]百首[illegible]侍る[illegible]月の[illegible]

[illegible]

いるもとうてう紀世いなくうたた毎のめ月も深夜なり
二条院此時代まて侍臣なることをいてゝ
いうるれい毒のを拾のうに年と為てゝ
第十七雑奇中
遁世の後花の奇とてよめる
雲れ上乃春こそ内に見るもの称花い称るもこい出て
花参りに法成寺よまいりて金堂の赤き花の奇なる
ゆえてゝ作りける
するなるもとて春こい桜をちりのまてもいれとゝえよ
寄信仏作る花の奇なる百首の中か花の奇とてある

此こゝて仏も世も恨こ向しゝのゝ行くも花いちりり
述懐の百首奇れ中か義の奇とてよめる
うれ爰い名残まてこそ留るれ此の世のほも行やるゝ
述懐の百首歌ゝ伝なる世の廉の奇とてよめる
世の中よ捨てそるられ名の入山の行くも廉そなくな
今上の御時之節の祝侍従宅家やまちのうさ
ゝ学しのゝ捨てゝ殿上のそれ伝なるその年も書
ゝなる又の年七法生れ称る比ふ院ゝ捨てゝ
なるゝきゝ花ゝ奏宣出ゝ詠ゝ中作りなるふゝ
侍りなる

ゆくへなの雲路まよひし年暮て霞とともにや帰りそろへき

第十九 釈教歌

法性寺入道見遅土泥変宅知道水のこゝろをよめる

むかしみやかりし山の井をもはかりけるの絶られしく水のちりにけるかな

鈞養寺の心をよみ侍ける

ゆふに文花をかりまつくらしの山法のむしろにれるこの空

第二十 神祇

いく度にかりぬるみをも経しの松いさりともゆかれまさん

同社の後春の歌合の時月の歌とてよめる

すゑ松門出る世をれ岩波もこなりとくまず秋の夜の月

新勅撰和歌集第二

名もしるし峯の嵐も雪とふる山さくら戸のあけぼのの空

前関白家歌合に雲間花といふ心を読侍りける

右衛門督為家

あさ緑にほふも見えぬ山さくら花のかぎりやかゝる白雲

第三 夏歌

寛喜元年女御入内屏風

久かたの月にかつらの一葉のみ木のまよりとしいく世なかるらん

寛喜元年十一月女御入内屏風にほとゝぎすよみ侍りける

石未つ晋

なつかしき紅葉の山の錦織の
中に秋哉上
春ゝとて今ぞ咲ぬる花の色
萩の上葉の秋の色風
春秋の比はひ百首哥よみ侍る秋哥
天のゝ川おもひいらるる色もなし秋こそ月の光なりけれ
後京極摂政左大臣よみ侍る時月の哥百首哥よみ侍
りけるに
ゆけば又秋のよもぎぬ露ふかき月にたぐへる
第五秋哥下
うつのやまのこゑも秋ぞ秋十首歌たてまつりけ
るに

右兼宣

関白左大臣家哥よみ侍りけるに
ながめやる方にぞ秋の月はさやけ
き山の端ぬ
才六条哥

右兼宣

君の哥よみ侍りけ
みなれてい志ゝ
泥絵屏風石居水陸付象
萩もしをゝ衣ぬれるゝ竹の
才十一京哥一

たくさんの口銭の落ちたるを人々拾ひとられい

右歌一首

才十二 寅二

建保文年庚申ふ久寅てい一所ゑとすを作りり

寅ふぬ年のたこう芝年祝賀ゆうとりの歌の会ふ

才十三 寅三

ふぬ人歌まりの浦ふるるなるやりの水もされて

門

ふ夜い侍士の寄ふ火とそれとえよ宝の八幡ゆ祈なり祈い

第十五 寅四

建保六年内義奇合ゆ

ゆふふ寄のふの衣ゆいれなりまれなるをみれをあり

歌十首奇ゆを作りりた

ゆれもさゆられてうれゆの歌ゆうれて抽ゆ寄ゆうな

第十六 雑奇

元暦のころ月の賀茂宣保人の歌を免侍て

社頭の奇合ゆ作りりに月とゆある

ゆのてやゆぬもりの秋とゆてゆ月ゆ

第十七 雑歌三

老のはる年久しくさいけて作りなえる風かふ
けるさとまいりて和歌のまりことにまりして作りなる
治りる民のけるものこころのそこひさしもいのちなりかへて
関白九条家百首歌よみ侍りる時の歌
百姿のもの〳〵はなりまりふまりぬるむる山のそれ月

後撰和歌集

第一巻 冬上

建保二年詩歌会ちなれ侍りる時 仁上巻

参議為氏

人ちりそなれるやいとう出はる侍りる入日の色はなれ月の
第二巻 冬中
洞院摂政家百首冬はなれ
はるる外山のさとの夜の庭にも時雨ぬ〳〵かりる雲
はるるなと時雨そめんいとの巻之作花山さとふ
花歌の中ふ
乙女ふりかへしの橋時雨ふり神ふる里かふ風しら雲
才四夏冬
天北川を紅葉ちりよ水ふりかるるの〳〵月毎の頃
才六秋冬中

秋ふかくなるゝ月をとはるれとも忘やせてし捨の庵

第七秋歌下

寛喜元年女御入内屏風に紅葉

立田山よその紅葉は色にこそ忘れぬ松の袖もみえけれ

建長二年九月詩歌を合られ侍し時山中秋興

それも何忘られましに向山紅葉をぬきて秋風ぞ吹

第九神祇歌

入道前摂政家歌合に名所月

大沢川神代の流わけとめて今もかはらぬ秋の夜の月

見しめ川三輪の杉村やすらひはや神代の忘しからん

大納言になりて悦申に日吉社にまいりて侍りける

たのまれし歎のなき世をいのりとし我行末を神やうくらん

參議為氏

第十一恋一

忘られしむかしの山にあるけしもいとてい雲にかゝりなる松は

第十二恋二

恋の歌の中に

待ふまでの恋をいのちにかけならぬ年月ゐるの末のかなへよて

第十三恋三

いたづらの人のこゝろへ予のうちになりひかるゝ夕くれの空

こぬ人の恋しかるらん月影いまてそ見まし夜はけの月

[illegible]

第十六雜部上

[illegible]

みちのくにまでの海いを出ぬれば流りて少国名をとゝめたれ

以東雲院殿御自筆本令書寫遂一校畢

六部抄上 終

定家卿作

庭訓抄

舞の曲前よりはねをぬけ此家の曲なり

[illegible]

[illegible]

の世乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とてかゝるを欲しとたりて学ぶ人多し
世を隠して歌の異慶を作り家集に代わり
人のおもまして世世まいまるふも及ぶこと
なの時ものゝうも古歌とぬるゆゑ但彩古年
かさなり風骨よさてこまりて後い又万葉の歌とぬも
さゝん好士い学ぶのるを賀て作る けいとの物ずむ
よとりても学ぶつきまゝ紀姫問とふを
問まりは俗よちゝ又おそろしき歌とゆ屋一冠
それとい今定ゆは及ぶ山考とて作る冥一山石前
は多ふ古風の人て作る屋ゝ多ゆ又遅寛や

山いんきゝん抜きれも言い構て問とゝ作まゝよくい
今一歌年とりも世先てりの歌とそゝかゝて時代
作る屋ゝ人元の姿とゆい新ゆ作ゝ十歌の中れ出言れる
う歌抵徳抵を人歌これゝの但ゝて山歌とりの中ふ
も如るゆりしき奇とりいまゝ人とそれい古歌なゝも
ゝかゝぬ安まてい考ゝれるゝ屋ゝ姿て先貞生
ゆ言ゝい考ゝゆて後い考れ見抵西抵を一高抵
抵ゝゆの歌いゝゆを拉鬼歌とそゝまま
多ひ抵を加ゝゝいなりとれも体歴のはなとりまれ仕
らさゝん加屋ゝに中きいとて加ゝを拉鬼抵う歌の勝歌を

作るまいはまことに初心の時いまだ花姿をもて作る故
屋〳〵先歌いたり和歌の作るべく先哲のられ〳〵
出来るものも屋〳〵物のいれまじむつまるを見えて
作るなりといたにおそろ〳〵物ときとなれども奇なるみ
作れいは優ふ咲るを所〳〵をくしを作るそれよりとりや
さ〳〵花を月なりやれものとおそろ〳〵に見ぶんい
何の論う作るんさても此十雑の中にいたれを中せるを
雑なるを〳〵奇の本をとなる姿い作るをもめて
ちいえを〳〵ひとを所うを屋まていたや〳〵作考らる
屋〳〵ものを〳〵おとを所〳〵て一境を入りてを稀

なるまを〳〵る作れまれいは空奇と申いこのことに心の深れ
とそやたり作るを又深〳〵心でいまんとて初ちを世せい
入からのおを〳〵奇をて思虚なからぬ姿の心はられぬい心
のるをもを〳〵を作る此境いや
〳〵を大をまていれ〳〵ま雑妙作るにそはとを
なるを人いかりをあるも狐をる心なを〳〵て筆家をまをもを
る作〳〵を正雑奇をを出〳〵て人の新をにとひぬ
もいは退屋の因縁をなり又道の毀廃をなり作るに
〳〵をれいは雑と員を〳〵ひ死ふ所りなる海〳〵
をくひを咲作り或いを奇とまを雑の〳〵をもを作る

ら波して後こそ人の姿にみえて其哥にせよとなく
かやうしこゝろによりて勅撰よりこゝろ出しけるも作者
またやかの題詠めし世にかゝれ諸子哀に無見侍れば
つゝ思はも高尚も哥とはよく詠吟しけしらへく
出れ無きなり跡忽のうへはゝを後に雖侍べし是
く有心躰の哥とて云にかなひて何とはしるべし但きはめ
此躰のよまれぬ時侍なり朦朧として心底みだりが
はしき折はいかによまんと案じても有心躰の哥出来ず
それをよまんよまんと志侍れはいよいよ性骨もよわりて
無益の事侍なりさらん時は先景気の哥とて姿詞の
そゝめきたるが何となく心はなけれとも歌さまのよき
く出る哥ともよみ侍ては四五首十首もよみすさぬ
きは朦昧も散じ性機も華しく成て本躰よまるゝ
事にては又恋述懐なとの題をゑてはひとへに有心
躰をのみよむへしと見えてこの躰ならては宜からぬ
事にて侍るさても此有心躰は余の九躰にわたりて
侍るべしその故は幽玄にも有心あるべし長高にも又有心侍
るべし残る躰にも又かくのごとくげに何の躰にも実の
心のなき哥はわろき哥にて侍る今十躰の中に有心
躰として別に出して侍るは余の躰の哥の有心なるを

いまを一向ふるき物とのみ思ひて古人の擇出
して作るかりの物も古くふるめかしきをのみ又奇
なる詞の用捨をして作るべし詞をたゞして強弱大小
はゝ〳〵それをよく〳〵考へて強弱詞とは一向ふ
これを作るべきなり花詞とは一向ふこれを作らぬ物なり
しかるに如何ほどこれをもちゆるゆゑに物ふ
るにたよりをもちゆるゆゑに物ふるを主として作るべきな
ハ主として詞ふるもなく物ふるに作る
物にして奇詞の稽考作るべし此三の詞を拉鬼の詞
なりと作るべきなり古人いとゝそれい

ふとなりて詞とは立捨より亡父にも中亟作〳〵或人の
花実の事奇なりとて中て作るよりして古の奇ハ三ふ実と
なりて花と口をれを代の奇ハ花のことふるなりて実なる
用もちゆるうと中ありむかし見て作るべし古今序も
此ふ作る中んさるに作りて拉此ふ写ふ亟推とと
つるにあらべし是作れいうふ拉ふる作るなや所謂実と
中ハ心花と中ハ詞なり必古の奇の詞ハはなはだ少ゆるべ
実と中ハさるあるとかゝ古人の詠作も心のなり
らん奇とハ立実奇と花と中ハ今の人はあるべきも
ものなるべし〳〵なりべし有実の奇と花と中作〳〵

さてふ公任卿せよ〜者のあれハ詞ハ次ゐ世〜中の似る
を詞ハ〜を詮とす〜〜れ〜いと〜又ハいなく〜ゐる
似〜り正詮ハ詞〜を者〜〜んとハ新奇ふ中〜〜心
詞の二ハ〜〜者の左右の翰のゝ〜〜なる〜〜きたゝ〜を
なるひなひ作る但ハ詞の二ハ〜〜者〜〜んいふよ及ハ
ハのゝけ〜〜んより詞の地ハ〜〜作ふかゆ〜に
者〜〜中作れも又涵ふ冥奇の者〜〜ふ何〜を定ハ
中〜〜き部〜〜四〜〜に歌の中ハ兵みのゝ者〜〜きて
作〜〜さ〜〜に人のこれ〜〜中ゆ〜〜る〜〜の家〜に和
つる秀逸の新まち〜〜なり後ハ者〜〜歌ていとれ

れ〜中て新〜て家ハもの姿の奇ハ秀逸〜ふひ作〜
〜や後ハ者ハ元もいと〜ハ世ハ〜ハ冥〜中〜〜り〜ハ〜
に中の〜〜〜を作〜〜に経ハ意新及を完作〜るも和
いハ〜ふ〜ふ大〜に〜り作〜るひなれも〜に此ハ
〜〜完作を家ハの中ゆて家のむ〜〜今〜ハなひ合て元
中に右〜りも者ハ〜〜ふの和ふよむ奇〜〜に〜〜のこ
を完〜〜これ〜〜ハ〜ひて〜〜〜ハ稀〜を作る抑ハ〜〜
言ハ〜に作〜り〜〜先哲の底別も今〜〜ハなひ者れて
作れ先奇ふ秀逸の根〜中〜〜者ハ万機〜〜ぬけて和ふ
〜〜ぬ〜ハれ十新の中ハれハの新も元〜〜根も

又その姿ぬ皆さまざまにて俳諧うるひて
ものなどに元冠者殿に人ひとるものもまて仕ひ者か
人の秀逸新と申して仕ひ云文なる奇のさまくと後
て先とそれ〳〵の所式のとゆるひて仕るそれは不完
のるまて〳〵奇式秀逸とて中俗くい歌とたも
よとぬ為〳〵先仕る流吟るる格り業俳をまるまる中か
てとかくもて所作うふ四俳まてなくてまいたかく
〳〵より中もくまとよるを出たる中もいうもく秀
逸は仕〳〵まとあいまけ公ふく為〳〵みふ詞のかまて
所まれるゆ〳〵まて姿けく〳〵云系なく〳〵仕者物と

さう志もゆまとう〳〵に必ゆ中まて色白くかなるなる系
類為ちそひておるけ為〳〵なるに今よとてさるかか
公も詞もそろうぬ奇まて仕るなり是というに仕〳〵ゆまて
ま〳〵うに稽古にたも入こふ自然とよを出さうるのは又
いま〳〵の奇ものの今の歌ものたいひ為ものれぬゆ〳〵に
吟ゆるれ仕るなりさる為ゆるるいうも初公の俳なる
為〳〵上るのまとこてまてと詞ひいひに云仕り所
ま〳〵かるまとを為めく〳〵ゆるるこれ已意のてかく
まて仕る〳〵それとうふ山〳〵公ひて学ひもえぬ物
う〳〵未俳の人のまるは何も片服いてきるまて仕る

大ゝこ奇かう考へられぬものハ秀句にて秀句も自然か
句すてなくすると出るとハさてもをぬしいとゝかく
きゝ句ゝとあるを句ゝ拾てえらゝえらあるるか
て付ゝ又なかるる中ゝハ中ゝ花の奇
と花にて花よりこと月と花にて月よりこと達者の口
さなるゝ言ハ奇とハ秋をなたよりこと意の奇とハ雑
や季ハ歌なりて志もものの奇とれるよりこ句ゝ拾か
よみ句をつきていなかハ詞といふにおいてとるる
いなるまゝハ句をてハ其中ハ論と見ゆる詞ハ二とりとり
て今の奇ハ上下の句ゝ分ちて句ゝ拾ハ多者い

雲ハ雲にて拾ふ人とハ人にて拾ふ
歌とハ雲の雲にて拾ハ詞とりて上
句下句ハ意にて意の奇なるゝ雑や季やなたにすむ
意ゝ此頃も此方とハ多者ハ詞ともとりて
よそ雲ハ雲ひも侍り多者のなるゝ
くも笑ハ花ゝ論と句ゝ詞とさるとるまゝく
句れること又俳諧ハ此ハとりて言奇とてあるるもて
さゝむハ俳の論ハ侍るつきるれいまるくこるるハ拾て
とるつきハとて又歌とるもちるる一字歌とハ幾度も
下句ハ拾ゝてすつきゝて二字三字より後ハ歌の字ハ

甲乙の句ふとも変〳〵結歌と一所よりそくるい世下の
るうて侍てかや又かゝらよゝうて出る奇を表とか
色〳〵ありとも表逸れの中ふまの〳〵のたゝ〳〵作るもそれ
となる句〳〵さよ句れかまゝ〳〵まゝ記るまてい仮文
よ〳〵出れ作る奇とりてまて〳〵文字なゝて歌の字れとう
出そうんい制の限さ句〳〵もとを通て作り変て作〳〵病のす
かるを世さ〳〵面りゝいる平以病もなゝうんいとりい
〳〵但病八病なゝい人の皆ゝれるるよ山い句〳〵〳〵〳〵
動ゝに及ゝれて但病ゝとゝれぬおゝの奇よるるぬれい
何の病もいゝ作〳〵るうて〳〵〳〵扱よゝ〳〵かゝぬ奇のゝも

病さ〳〵らんい又ゝ作〳〵るうてこそいあ三音の奇みその
奇れ玉十首まても口句とよるい心作るつきていあう
らしかゝぬ句い句ゝまぶよよあるもゝかゝれ耳ゝ立
ゝその句〳〵ふるう句ゝてふもも二字三字を句
ゝゝよゝ作れいあさゝ記るうて地神ゝ句れかのむよ
世人ふゝ〳〵るゝゝゝ記るゝ不淺亡文々制〳〵いた
作ゝる又ゝゝゝ句ゝ山雲仮々書るゝ中〳〵の句いい
ゝゝてよあゝんゝも句〳〵ゝいゝゝと定ゝゝれかるうん
家のゝてかゝうんいゝゝもゝ記〳〵句とよゝゝゝてゝ
いゝうん云ゝれ為世歌のみゝりゝゝ〳〵る記〳〵句れゝ

よきまでさんいふはよろしきにては尚附眼の哀夕暮
の秋なるゆへの詞作りなど上手の好士もよくよくするべき
くつけられぬるまでは中々しきを何事の哀夕暮
の秋なれ侍りて上手も哀なは秋の夕くれ哀の眼は
出たしそはめれきたに心をも詞はときつめるに作れて
何くらしくるめてらしき者作んいは左様妙なる一くいと
きつて何の塗何りとも不見殊なとし給ひぬすまでは
出れそ奇れきたるつきし様なてはあるかぎりいはぬくしきる
も能くもよできしないは先な志ゆし十様と人
の氣の越とかへてさ作くつきまでは異意も異量なぬ

も文なる事様作るへし或は幽玄様とうけ給ふ人に拉(ラツ)鬼
様とよあるとしへ又或者は様を得たる事なる濃様と教へ
は何かよくはつきし只仏の説の何事もこの正法流の機に
何くへ随へりしやあそれなりかしもたゆるへくは我とこのむ
風しうまあるる姿あればよて此様とよあるともえさるん人
まとし通はいんなる道へし此の魔障までなりし上人の
おあん方とよりしえをくしめて後よ風様とまらく
つきまでは何の様ばすんまもなく安しきるすいなる
至て入るかくつきはなしそされはとて又は一様な入めて
修様ときてよくしまいはいは得たる所は地盤として正

伝ふるとまをして祖宗の躰とするいふこゝ
まを西行法師まをされて行ぬるにおりもてはしむ
つきるとまを見伝る人々の世もかゝる所なる五の道
者れるひとなしこゝる事も多分なれの弱とまをして
て只我身むやみにまをしまるとのこゝろをふるこゝ
ろぬるて伝ふ若られすりあえてあもたく業
しまをれこゝる姿と骨とまをん人のゆゝに梶
柳していかゝまるゝ伝ふこゝを後新野法法補那法な
ゝの意訳物もいこゝとはまをたあり猶ゝ邪ふ
なもゝ正とそいこゝもまをりとふこゝろまを如

法是量なる人もこゝ意訳文をまをして雅忘は図をてゝみ
かゝれいはれ鳥は形は形むゝ事のひなりまをて非量
の人れこゝに見こゝ只こゝ人ゝ行ゝ行ゝこゝ
くい如行こゝも行ゝ行ゝいを凡奇とまをこゝ多白て居
意訳定はるゝ阿こゝに方切のゝまをは只人こゝに非量
こゝりまを見伝こゝ天をいゝの上いこゝ世こゝ人の訳こ
こゝいこゝもなられもほゝあひいゝゝえもひられぬ新乃
御化とい按那の云るれこゝ信句那とこゝ伝ゝ伝ゝこゝ
伝ゝり只こゝまをりて云れ信意とこゝ人のこゝひめ風滅
行さまを記事とあるこゝ凡い偏は豊孔はまをゝ風

少くなりゆくまゝにおそるゝは寛平以後の先達のうたをも書思
の行ひをもれん人をそ今の世旋ぶねもるまてに作るつきかく
ものもかすかに中作れるも無尾も作やゝ奇特なる歌作
をこゝそさうなのゝさまして異ものゝ事をもて見作る広
元久の頃位右京兆の時 卯月はかりとて霊夢ぶ
感し作によりて家風ふるんしあるは月記を案しと
まて作るもかりいとふれるさをひかるゝ中のそ
ゝとゝ中作るまいかゝそゝいゝを見作る又右侍の詞と
もりてもるる九奇よいまあ作なるいゝゝもゝ中ゝれ
もいゝゝゝかゝたゝそ書ゝこのまて世ゝゝもをゝんい

一度作るまゝや作れん常る白氏の集才一才二快の中
に大番の不作りれを抜ゝ中垂作ゝ清いけゝく
を面をあまてい百奇ゝれん世い言人の御歌なゝい公中ゝ公
そうに此ゝゝゝ面去序なゝい言詠もをゝゝ奇ゝいまゝ
出とゝゝを面そう一のゝひまて作り宮公ゝ日記ゝ
ゝゝゝゝ元ゝれ侍ゝも又奇ゝも心ゝゝゝゝれぶ
ちのゝゝゝゝゝ作ゝ初公のほゝいゝふゝちふ事ゝま
ゝゝゝゝゝに歌いゝゝ事ゝゝゝゝ事をゝひて問
ゝゝゝ事ゝゝゝ世もほれ初る退ゝ公のいて作ゝまゝに
れんゝあゝいゝゝたゝゝゝゝ作ゝゝまて又世た

志ある人に業してよめと云へるもいさゝかはかしくあれはなし此会
合の時ハ脇より句数あまた読ずして我が作意を右にも初心も
其之内すくてハ百首あまりの読句より初心ハ只々首巳達ハ
七八首よみ習ひてハいふへし初心のほとハいかにも句を作りて
まゝにもとよみも自在に同じ詠しするまへくハ詠まて
らん歌といふ作者人をちからし思ふ事やさしくあるへからそ
はいかにも未練のあるハ同じ詠しなからも能々て詠ま置に
よしやうまてハ見つらハし此歌の心をとかく工夫したるか
まいひも見ろなるつきまて作りくせ歌になりたるよみ
にあれてハ今はとおもはん時又すこしふ為てハ雑歌

ならひとてうけとせんしてハ不叶ハ句といふかまへて正しく
居てなしよみへくハ或ハ立所の業しうたひて読かし
句と自由にしてよき作りぬれハ時の作法式あるひハ句
やうに覚えてまへらよまれぬまてハ何事もくせに成
てハ詮なれまて待へし手川よみ見ハ先ず志学の
うらハしきとわきてよしとやるまてハ行きさ数も花
正しかきまして出へと作りいはしあやかしにハ又句
の文字ハよく思慮して後にとく読きまてハされハ故
様にも句ことに文字といふ法につきてし何の旅情のこと
此作法の出来てされハ何の心に句毎に初句のきはなか

る覆なり人〻不審〻仕〻是言に[illegible]
出し紙か泥の紙よりとり仕て仕〻ふ淵底一切[illegible]
[illegible]に[illegible]中ちい宣て驚驚[illegible]
〻きまてる必[illegible]
[illegible]
〻て〻[illegible]の[illegible]

建武二年六月十日以彼寫本懇写之此度別
者京極入道中納言令分故衣笠内府許之〻第〻
〻后銀一〻玉泉也ウ秘〻〻

第ツ凝花

文明九年三月廿日以或秘本令写〻和可〻秘
傳尚道〻奥旨也紙背尚和〻抄文五〻処科
尓志手

持達原通秀

ワ十七年小弓上九於焼下一付終功記彼本志
中院一尓通秀自筆也依或人〻言云令写

る変也

以異本令校合訖可為證本歟

桑門宗隆 在判

きえなん世まて惜からぬ
ことわりの
ゆくはなかりさ
きえし
なりとも

和歌口傳等　家隆作

夫和哥の起ハ家々に伝ひかなる人々のそしる所まち
くなりといへとも合して先哲の口伝とハ是へらる此集ハ
極秘なり依而をしに深く繋りける事ならん人より外ハゆめ
もへらす此道の唯受一人なるへし若ゆるかせにする
ものハ何ハ哥仙の冥感に背くへきもの之

一 歌仙

哥仙とハ此道に長せる人をいふ哥仙の數ハ三十六人と
いへともまつ和哥といふ歌仙安置すへし
人丸　赤人　業平　小町　猿丸太夫

是等なり又作とふ哥ハいづれも権化なるによてなり又
和哥の徳識とやする住吉大明神ぞ申されけり

一心詞注

哥ハ花鳥風月によせて詠るも必心に結びつく所詮一加
と結ふへし たとへハ佛法に通する心なるへし 哥ハ化云のこと
はりをいふ也 されハ一もんに哥の所詮ぞ志ゆさつる志之
出假利生の方便世俗の假名ぞ結びけてとろなるの
ぞ筆川秋の雨天に出て説法利生して語し世に施しそ
の世の凡俗の詞ぞ以て仏法の実儀ぞ定りて漢土にハ文詞
ぞ以て人の心ぞ和らげ仏法弘通の方便として家朝にハ

三十一字の詞ぞ以て人の心ぞ和らけて仏法の妙なる
ことハりぞ志らしむるなり されハ哥ハ仏法の大意なるへし 能々心
得て哥ぞ詠むへきものなり

一五句の名

五七五ハ陽なり上句 七々ハ陰なり下句 五七五ぞ天とするなれ
はかなる心に祈るへし 七々ぞ地とする故に上にむかふ
願ふへし 下に心得て詠むへし

五 冠頭 七 衣肩 五 帯腰 七 裳尾 七 沓足 人の五体なりとて
いふ 此に何れハいらぬところもなく上下に向てむかしハ
衣れよ衣ハ胸ぞ作り頭へ志るも袖のかゝりをやるなり

常は花あよ勝ばうゝさされ嘗は花の上よむうゝ
よ足ばおさ免てめけされゝゝ作流をゝさ孤をくにゆうゝ
文標　七流　文支　七曲　七陰陰
標ゝは歌て切ゝはゝて上つきなり流ゝはたまをいひなり
せてなり支ゝは切はいせていひきゝは次の句をうゝ
ゝなり曲ゝは歌はなあゝなり際陰ゝは上下の句をかけ合
ゆゝにあゝなりをゝゝは
標流　標ちゝ水の下流はゝ支ゝむうゝて曲をゝゝ際陰ゝれぬ者をゝりゝれ
大ゝけ祈なゝゝ
文序　七歌　文支　七曲　七花　ゝふゝゝ色切り序

ゝは歌の序なゝゝ支曲陰は先をふゝゝをゝゝは
序切ゝかゝは歌葉花なゝゝ支曲をゝゝ者は俗花
詞は花ゝ先をゝふなり
文情　七序　文歌　七曲　七陰　をゝゝは
情序　なりの山序花の山は歌はゝゝゝ曲ゝゝゝゝ陰高花は
文情　七流　文支　七歌　七陰　なゝゝは
情流　芳山は芳流の梢の支言はれは歌は花声は芳は
又登蓬ゝ伝はは遍序歌曲流ゝゝゝ遍ゝは切ゝゝ文句
はゝる句をは序ゝは歌の序歌ゝは切ゝゝゝ花曲
は歌はふゝゝゝ流ゝは花ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝは

遥 序 月 [illegible] 山の [illegible] 歌 [illegible] 流 [illegible]

又 序 惜 七 流 又 出 七 陰 七 歌 [illegible] 流 [illegible]

[illegible]

惜 注 [illegible] 流 [illegible] 出 [illegible] 花 [illegible]

又 此 歌 法 師 [illegible] 序 [illegible] 脇 偏 流 [illegible] 序 [illegible] 偏

今 花 [illegible] [illegible] 山 [illegible] 歌 [illegible] 花 [illegible]

[illegible] 脇 [illegible] 上 [illegible] 次 [illegible] 下 [illegible]

七 [illegible] [illegible] 偏 [illegible] 歌 [illegible] 外 [illegible]

[illegible] 入 [illegible] 偏 [illegible] 流 [illegible]

云 [illegible] 仕 又 歌 [illegible]

一 [illegible] 公忠卿に

[illegible] 朝 [illegible]

此 [illegible] 花 [illegible] 河 [illegible] 仕 又

歌 [illegible] 又 [illegible] 曲

[illegible] 妙 [illegible] 妙 [illegible] 歌 [illegible]

[illegible] 河 [illegible]

橋 [illegible] 尾 [illegible]

橋 山 [illegible] 日 [illegible] 河 [illegible]

よすがるこ思ふ

うゝ林をゝ之のふれ山思家の雲かゝ所々の所もなきまて
思ふ人の雲の云うとれ和なれもかゝ所々といとん云わなり
釈句とハ所ふ句縁なる河波すてあ林ともものの月うより丑
る所波御るこ

雲こうゝ梅さうなる我者ハうとれし人ハ和よこそすれ
ふれ新なるゝ〳〵匂ハまもゝとさうる所ゝこうゝるか
うれもゝて御なり

うゝ波ふもる秋のなる所にまるる雲の雲をさうりゆ
ゝ新なるゝ〳〵又秀句のうこと砧前のうこと射場奇とて所り

きゝとハ秀句とハ

秋の世ま花見るほうの公とハ行とやいとんと所とやいとも
ゝ新なり砧前の奇とハ

うゝ雲ま加ゝ武蔵と見あるる新震先るそゝにうる丁ま
ゝ新なり射場奇とハ句とゝに射ゝて御とゝゝもゝハ

雲ハのえ秋ハふうゝ加所ゝ震もうりも多りとハ句の
又句波なゝゝと射をる波も所り

雲ま所ハやそうゝ水の面秋の紅葉ふの所波とそく
雲ま秋波射ゝ綾ま錦と射をるりまゝの奇ハ雲ま秋と射
ゝハふゝゝに加ゝ波射ゝ震ま音ハ射を又上下物波二ツ

とて云ひしといふも一体とい主る神もあるべし

秋いるべし水のうつれもてかれもてこそ月いでぬ

皆称なるべし連句い此射場の源出なり又浮の心ばりて

文正しふる所一は言砂二は膏逸三は皎潔四は沖漬

五は藻葉言砂といけにくいる花称し

ずしまの口ぶやゆしこ名りの雲井よ志ろ花峯の明行

此句ハ入るる為ばかりこそいとこ面し花ま称れも

外よりていい一句の秀逸なり定家々えるに所れ侍り

称るべ入侍り膏逸なるべしいけ侍る称なり

所ハいまこ秋のよそ色ぬ月のたしきのこころハ

皆を定家々の一句の秀逸皎潔ハいうちこそいうて心

得るべくして志も能べ事ハいえんなる称なり

まやらなる月ぶりの所の夜れ雲い秋の夜新い別所の渚

為ハ和尚い此称ハ好まて源をれ名なり沖漬ハ少し

衰なり称なり少れ門侍の奇ふ

とをふべこ袖いむ所にれてぬ家王髪ふ為こ月ぶ

皆称なり藻農ハいうべ〳〵為のまべなる称これこそ

心まくしの能称なるべ

さ称ふまて系ま之ハ所ハ色系ま名れ書あとこそなれ

皆称なるべ〳〵又ハ正べいふ所一は芝蘭ハいふ詠られ

言砂と膏逸口祈なるべし病枝沖深と皎深と二
説伝る祈なり之を將石干仍と云廉薯の祈なるべし巴ふ
哭畢同笑ふ者なれいやしくも乞て乞物乞て乞祈なり

已上

凡奇の名多しといへども皆字の口伝ありて但六字
の事ハ名多なれい此字の名ハ口伝ふ所なれ巴病八病等の
なるハ大なる人のさとし如なるさとりなり毒泥なるに及ハ
次此第ハ之り拉なる人の伝なる所なり為なるなり
て少なる所なるなり而已

和奇口伝　桂中仰会爰来家隆卿

此秘説家隆卿御所流伝事所也紙有片時他人に
見る不波也先作化也

建久三年七月日

大中臣忠光判

近代九首次

拾遺集 藤原良基公作

歌連歌の中ハ只代々十年公匹しらの中作ことに耳の底
よりとゝめるハ也 文ハ天性とそなはるも能〳〵稽古した
らん作者こそ多のゆへ五年の教学よりて世の人を
学〳〵作るゆへ詠歌のことハ也〳〵立いとゝ成たる作
也ともなを名家の冥加ゆへ代代の勅撰も奇特なる
まゝに入て作ゆへ此度の集ハ名ねゝ中納言にして和歌
とゝてまゝれるゆへ元久の比ゆへ和漢ゆへ侍
しゆへ分の眉目ともなるゆへ貞和の比い毎月之
度月次石前舎為定大納言の題又判ゆたて何ゆへ

家の人ゝは乃志乃秀仁の流まて作〻為明々は時〻
見作〻と牡丹芝蓮為好〻流まて不好と中ゝ〻所後
乃英なゝは又勿論なり門真素堂入道所行なりもすま
せ作〻と云は牡丹芝為之人〻いられも〻上手といへれし〻頓
はかり出云る姿なきらたに〻〻〻〻なして云も奇
〻に一〻〻〻〻〻〻尚庭の感もあ〻〻や芝蓮はうと
このこて扣さひてちと百姓ゆ〻〻て姿なゝ〻まて
耳ゆ之中〻に作〻と乃為之乃沈云はゝものかか芝蓮は
ほ〻〻も花為好は此中ゆちと〻〻〻〻に人もな
ちゝ中〻まれも人のにゆる行奇も為〻作〻と牡か

かゝれ為れかゝる此奇は牡丹芝もほゝ中紀ちと謝詰れ
牡〻〻〻〻れは為〻〻のるもなゝ〻と乃英奇も乃
定仁ほゝ中まれき為〻〻〻〻〻作〻や門真某作ちて
欲流名〻作〻所行も仁乃乃為仁為為〻
作〻や山外祖月名〻ちゝ〻〻〻ふりのものるは為ポ舎
合詩也家の人〻れるは人のゝかか中〻〻為れも世
の人のにゝふきかゝるや中仁の人中作〻は乃為乃沈
は極て為〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻作て為も又りも〻〻〻作
方も出ル〻〻〻〻や

〻〻〻為極〻〻なのゝ作〻のうゝみやゝれゆゝ〻なるん

雖及ばずほめあげ元天下偏執もなりぬべし上古之為用之
ハ生涯は西白紙中ゝ入るゝ所にて人ゝ
中ゝなる奇とてよみ作なりさしく聊反歌も作
りは作り紙
たいあやまり後語の為なりて世のことゝ
元弘の乱の時よりて人の口ふるゝ名誉きれ作り紙
為太々天性の場紙とい光作ゝ作りしも時の奇なりい
よくよまれしゝ古奇とゝるゝ紙好ゝ反今なりい えふ
三条光ゝられ紙誠は此の人を光作ゝ為雪にこれハ格
あの巳前一流の源奇又何ゝぬれは作なり後成公紙

の奇ゝなる奇ゝ為ゝられ紙の巳前ハ下ふなりゝ中ゝ
ゝや反前は拙ゝ詞ゝ詞ゝ詞ゝ詞ゝ
まれしゝ為ゝ天性骨の人ゝ為ゝ
為ゝ作ゝ

はゝれて後ゝ為ゝ
なゝ奇ハ後世の為ゝ作ゝ為雪ハ近年の後
紙なり若くより巳骨天性西公ゝ奇よみて作ゝ紙
芝運ハ吳巳なる中ゝに作ゝ紙奇ゝ又何あり紙
如は後奇合ふまゝ初年ゝ浦派後執の為太為秀
もよくよゝなりゝ紙若くより為定公ゝ為ゝ右京せ

もしこれを宝として口伝有り実も伝へ生涯の骨肉なる奇なる物
なるべしと雖て南庭西公なりしを此大器家道なる伝へ
いまだ及ばざるとよけひ伝へる公家武家なる伝へ
抑此人のやうれ むかし和泉なひ出るに当りて古分伝へ
なりなるべく人にも存ぜられて治定なる所なり
一歌の巳前の此人やうれ公儀なるこれなくまでいま
さ人の詠なぬ巳後とやうなるこれなる伝へ
一歌の巳前なるやうれ新古今なる伝へ
てうけなるこれなる也なるこれなく
不耳公なるなる

一なるあるなる奇なるなるふかりなるこれなるこれなる家公中
なるなるて後ふ古分なるなるなるさこ
一石肩の此奇文乃奇れなるよあるなるさこあるてなるなる
なるなる紙なる分なるなる百姓なるなる地なるなる位石巳ふ
巳なるなるなる文なる
なるなる此なる
一出なるなる病なるかなるなるなる時の歌なるなる巳
一勅撰ふ後後撰氏アヒ入道なるなるなるなるなるなる巳
新此集なるなる
一宝治の氏新ヒ入道の此石肩奇の新て伝へなる中

一新古今抜書の記集は[illegible]初公の人[illegible]
[illegible]人は此集とえんをいとはしき
一乃爰々石首文保の乃定々石首なる紙[illegible]
一伝[illegible]て昔の上もれ奇は今の[illegible]紙も[illegible]
[illegible]
一乃童々[illegible]は歌は[illegible]新[illegible]は西[illegible]縦令星宮
の歌尚世[illegible]は伏見源[illegible]人の[illegible]
[illegible]
[illegible]や[illegible]も伏見[illegible]郭[illegible]
一為童々は[illegible]奇[illegible]

是牙貞和宮初の出石首は乃爰々吳服とよそ伝[illegible]
の集は多貞和の奇々[illegible]伝[illegible]は
[illegible]は才一の出首のうち初度[illegible]
されさ云吳来るや是は市石首こそ乃定大納云合点ふ
て[illegible]
一後光嚴院乃定の紙とよそ[illegible]
院文中さ[illegible]
は捨[illegible]
一花桐府より[illegible]
乃を々は家の編勿論[illegible]乃定々は乃定々沖云の右

筆とりておほく虚實をも承侍らんか登中比仍それハ一向
左右なく作法なれ侍らすや
一本歌とよろしむるハまれなり後鳥羽院の比ほひも宗
將は人毎に本歌をとり侍りそのとりやう根となりて本歌
と上下の句よ重たるハ其のことしとかりこれとよしとも歌の詞
をとりて几情をかへぬ様に是しつて本歌の詞ハそこにそ
おもりんせいハとりれまあをろ歌をとりてたる花の見ゆれ
らえの雪の色とある又本歌の心をもとりて行く思
ゆうに見ゆれ歌も行りをさうりゆく志らの浦浪と云ふ
歌をとりて志られるやまを佗りゆく浪岩よりとある

又本歌に猪苔志ける新行り心ある人よ見せさせもやとよいふ
歌とよりてこゝろ行れなむ身をおもふ為かとよありし又本
歌の心をなりくる事志も本歌を通ひしてかむ新行り
とりも志られけりもまて忠岑の夜のといふ歌とよりて智
そゝれ梅のうつりひまうれひてとよあり又詞半は云歌
歌も花のうつせ此歌は先年新行同音の最同貫治
合うに志るし侍りし中ニ
一源氏狭衣なその歌とは歌合なとにおもへるはといへり
それも作例は侍らん
一本歌よいは堀河院の百首は作者まで数をとるへ同じく名人

の哥とるへし　勅撰ハ後拾遺まてとるへしと申せ從今ハ
金葉詞花千載新古今なとの歌を見んハ何ヶ合しかる
歷代はかり花相府へも申侍けるに此哥ハ新古今まて
をもとるへき比哥よりハ近代の哥よその哥とも用なり
一後常十金ハ哥讀ミ二の種ありて歌好く執ある人ハ之
味に入ることく其歌志りめて幽玄にきこゆる人の
好むさぬ面歌集にへし又きかぬ詞の哥よそハ當世の
ことをかるぬまてまくるれまてハ見えへるにさのミ哥ね
のとやさしきやうらしくとらしとも猶るへるに當世の哥ハ先
もろくともよきをとつてかきなてるもかくもるそれなり

貫之ハ立形ハ志作くぬまこる堂よき和泉式部ハ及る
ることてもせなまよいふ哥ハ骨をあへりて秀逸とほる
られほとりまて今の歌ぬきろとし
一姿詞のふよくハ風情のきさくるも合しらは花と風
とりひ月ともぬ歌はのひなきさゑるいハ上手も志るぐわなり
さのミ好ミよむへからす
一哥ハ詞きくるゝ歌よきこ後成定家もやされきし連哥
ハ詞そへけていろかハぬるし
一中古ハ二文字歌なきをハ推行中にもえあるへし此の
出歌ハの出とよミ山の庵ハ山ハ庵とよまんするを

一むもひ歌といまいして後〳〵又ハかゝ和流とりて後〳〵
一奇の歌ようみの字うゝぬみの字ゆゑ〳〵世界の和字
江上の上世字なりくゝあゝくゝぬるなり
一歌の字ゆゑゆゑくゝいさてむるゆゑ上るきとの志ゝさゝ
初句の人い我〳〵ゝゝをくゝも有明にも後るとして伝さ
一奇の後歌ゝゝるゝい歌の和ゝていなくてゝゝ和とすさ
ゝゝるとゝゝるゝ又奇枝とすむゝ口ゝるれゆゝるとも後歌
ゝゝゝり之首之首の奇ゝゝいゝゝにゝゝゝ〳〵石首なゝれ
ゆゝい云云陸奥の和いくゝゝゆゝゝゝ〳〵
一三十一字ゝり何ゝるゝい秀句の世ゝる細ゝ〳〵さゝゝゝい

云用のゝゝ
一毎月月末日ゝゝるせゝゝゝ月前の歌ゝて五夜月入ゝの
月なゝゝゝゝ
一海色と浦と見ゆゆゝ〳〵社頃神祇又見ゆゆゝ〳〵
一ゆゝ云の歌之云ゝゝむゝゝ者れゝゝれゝも移見ゆゆゝ〳〵
さゝゝ乃家口中まれ伝ゝ
一新歌ゝて要ゝゝむゝい南要いゝゝゝゝ代の要いゝゝ
ゝ代例いゝ代かゝゝの代例ゆれゝゝて細ゝに用ゝい
ゝゝゝ〳〵
一京物ハ者ふゝゝ自ゝゝ〳〵為ゝゝゝ〳〵一月害なゝゝ

いたづらもいれも詠しき為ぶなりといとまめなることもれも
秀逸よるれいとかくさるる
一奇は病いは日公の病々才之才四の流れ字とと煙〳〵をか
〳〵の奇よいとかくるるは物ひは他奇合る狂先達
姫こる病も作るまや
一奇合よ月の歌よ花ふ落花じむ〳〵
一四一の詞詠奇一秋よ之もり

三

霞ふ春
嵐をかるむ
花の中て花
月よ四のまる
霞よおぼる

むるるき枝ふ
こるれて春ひく
夏
四やめをかる
秋
四ひいう花
れるて鹿は
月やとまの
ひるれいまふ
冬

花のゆきちる
流よるるる
夏は山ふ雲
ぬれてや雨り
尾を花流る
雲の底なる
月よう花ふ
雪立の月風

[illegible]ぬ水を　出りて出た　嵐そよぐ
[illegible]よりて　言のはふれ

哀

空なる[illegible]の　[illegible]れても[illegible]よ　[illegible]
神[illegible]より　めぐりも神の　我の[illegible]
むもそぬ[illegible]に　[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]

雜

[illegible]の[illegible]　月も旅宿の　[illegible]
以上[illegible]一[illegible]なり　不[illegible]世なりとも人の[illegible]

[illegible]詞なり[illegible]
一制詞の[illegible]
[illegible]代[illegible]禁制の詞[illegible]
或い定家卿乃家[illegible]の一向の止[illegible]
い[illegible]歌[illegible]
[illegible]に[illegible]詞[illegible]
[illegible]今[illegible]
[illegible]人[illegible]
一一向[illegible]不[illegible]用詞
[illegible]　[illegible]　吹嵐[illegible]　みやまの[illegible]

已上文應中務ニ文ル而有ル民アニ入道為家ニ亡父不
可諍之由順徳院ヨリ云々
玉のとやろ
ろも出ての奇合ル詞ヨ後成の判ニていろ〳〵未の勾のと
の字やをこ〳〵いろ〳〵ヨ上ていろ〳〵順徳院ヨリ有
ヨ定家ヤ云玉のとの御の子細先文被書ヲ先早云
一中〳〵の文字
承久二年八月ヨ夜定家ニ判云未勾ヨ不合ヲて片
とろ〳〵ろ文永ヨ年九月ヨ三夜為家ニ判ヲ中〳〵いひ
なをきてもてて伝ろ出て新ヤて風皆ヲ歌ヲ什抵なれる
近頃畑〳〵ろ止ろ
きろ
中務ニ新ヨ家ニ而有奇合ル為定ニ判云ルて〳〵ヨ云
詞ヲて諍ろヨ亡父ヤル又ヨ新合て歩〳〵ヨ毎度ヤヲ
夏の夕ろれ　ろ面ろ行事ヨの　行ろれい
おりひせて　ヨ此ろそ出れ　抽ヲ出ル
ヲそろ行ル　ヲ此いろるヲ　死出ろろそ
家こ〳〵　答こ〳〵　うヨろ才
以上て止ろヨ為ル子　芝融法眼抄ヨ見ろり
ゆ〳〵き

永享二年十月住吉社奇合の後加々判云ゆゑ
なとゝ為ひとに奇の詞を所望〳〵撰集ありけれ
ともゆゑなき云詞(ケシキ)まゝの詞多〳〵ぬこゝろいさる
多〳〵治承二年右大将家奇合詞判ふゆゑ云
詞兄女の略なる詞にて廣幾まゝ
かゝるまゝきこえしき
六百番奇合ふ後加々判云所なりゆゑ仕人又云かゝる
まゝ云詞いまゝなるゆゑ又ハ云所〳〵こゝろ所〳〵
なりかゝりなりゆゑ云文字ハ未体の奇なゝハ仕ふ
このこゝむこゝたにれしきる形〳〵ていなるよむまゝきるふ
こゝゆゑ所〳〵已上已来廣所の佛の物なる多此詞ハこゝろ
くかゝるまゝきるまゝハ今〳〵
仕〳〵
廣田社奇合承安二年十二月八日後加々判云仕〳〵
持所ゆゑ所〳〵少ずも所ぬゆゑ奇合建久六年正
月四々判云仕〳〵の詞もいるゆゑ少多仕〳〵の詞
相廣幾ゆゑ仕人子文百番奇合判云相ゆゑ仕〳〵
ゆゑ所〳〵此仕〳〵ゆゑ所詞いゆゑ仕〳〵ゆゑ所
〳〵仕〳〵こゝろまゝ仕〳〵此奇ゆゑ所ていゆゑ殊勝ゆ
仕〳〵〳〵こゝゆゑ中〳〵ゆゑ所この判のこゝ所いゆゑ秀逸の詞い

ゆふべつきよ

雪の曙

経房卿歌合俊成卿判云此雪の曙といふなれば今の

世の人皆よくこのむ俊恵法師が読出しける詞にて侍るを

時もゆるされ中侍れども又為定卿文保の此百首よとう

れやうきの雪の曙といふ歌ありしとかる秀逸の時い

ゆふべつきよ

春の夕ぐれ　秋の何事の

六百番判云春の曙こそえんなることにいひ侍れば

秋の曙春の夕暮何ならしくや

春さむ

千五百番判云すさむの詞やあらましきやうに聞

らん又同定家判云すさむと云詞のふるく聞ゆれば

や侍らん建保二年八月定家の判にすさむと云歌

と難ぜられして誹せられたり又うちつけにすさまぬはなき乃

披哀と云歌などは定家卿ほめられたり

また

六百番歌合の判云またの詞庶幾せられざるなり

うき人

建仁二年九月水無瀬歌合に俊成卿判云うき人

[illegible]

[illegible]

六百番歌合判云[illegible]

[illegible]

[illegible]

月仙洞ロ歌合ふるけの河みなくちに為家に雅経[illegible]

[illegible]

六百番歌合判云[illegible]かゝる又建仁の歌合

[illegible]

六百番歌合判云[illegible]

[illegible]

[illegible]

此ごろもどきまゝとゝ
月花ぶとのうゝむる
住吉奇合判云月花ぶとのうゝとよむるいとゝしくやゝ
雅なれり
なるべ
六百番判云なほ〳〵ゆ玄不度幾又云うちうち
なる詞と又文永仙洞奇合ふ物家々ゆりあるいふ
ゝゝぶ雅なれども
かゝる
順徳院出百首定家々判云うゝの詞遣ゝと物語
合ゆり
ゆゝゝ夜
千五百番判云ゆゝゝ夜度幾せゝゆ正物侍り但
御室歌合ふゆゝゝ夜雅なれもて侍せゝれゝり
小〳〵ゆゝなるの一の字
形囊濯川奇合ふ〳〵ゆゝ云〳〵文字ハ人のよむるに
ゝ侍れもゝゝ祝ゝ
夜りゝゝ
新撰七百合ふ後鳥々判云夜りゝゝの詞不ゝ度幾
ゝゝ　なるべ松てゝゝ云詞なり

貞応元年九月奇合ふ定家卿判云ふはぬ中ぬきとは
はつてうゆゑの詞とぞ侍るいにしへよりよこ侍るまうた
ちぶ
永万二年重家朝臣家奇合ふけなの奇よ多くちう
ゆゑにつきて人侍りしぬ出れるおり此詞を
侍るゆゑん
月やはぬ
定家卿云かぶりの名奇れよみまいれて我
ものおもひは
定家卿云ふるとやさしかりけるやはん

ゆゑやはぬ
建保四年十一月奇合ふ定家卿判云ゆゑやはぬ所
かりけるやゆゑ侍ん歟いまやまと詠りし
ころぶ
貞応元年七月実房家奇合ふ定家卿判云ころぶ
近年智不耳公
人ちう
貞永奇合定家卿判云人公ぶ云文字今ハぬとよむ
うぶ紀

奇合は宣家に判云うたれこの比は河いを屏
ぶたりて作る歟云まいこ[illegible]ふいなや作[illegible]
紅葉[illegible]たり
度々れ判よりあ所に[illegible]所の中沙汰を
あてさ
宣家に云は此奇は[illegible]紀白紀て作[illegible]新作紀
大[illegible]
文永二年九月為家に判云大[illegible]れ風流[illegible]て作る
又云大[illegible]八月ともめてしてふみ字はれ[illegible]
けり[illegible]は此文字おき[illegible]為家に中さ所

作[illegible]
なし云名奇の文字詠歌[illegible]
第れ[illegible]
六百番[illegible]後鳥に云子細[illegible]中さ[illegible]位を年いさ
さ[illegible]沙汰[illegible]
名も[illegible]
[illegible]れも名奇の文字なり

此一巻道[illegible]牧奇吳伝[illegible]書き松田丹列者也老
耄年不不[illegible]為指南欲不[illegible]伝[illegible]

寛文元年十一月十三日

後善光園殿政敬也
准三后少列

抄

右和歌秘伝随一逸連〻加書写今代一帖於
在右為彼兄也敢不出窓外耳矣

天正十九暦蜡月朔日

玄旨 判

六部抄下

瑩玉集

略長明伝

歌をよむことは人のこころをたねとしてよろづのことの葉とぞなれりける
世中にすむ人ものいふこえをきくにつけてもなにかはあらぬ
ものをおもふこころをたねとしてよろづのことの葉とぞなれる
ひとふしにしかるべき家にはいにしへの歌聖もきかまほしき
ことのこゝろをえしてよむべきなり
成茂陰の式部卿殿の神代歌をうけたまはるに
いにしへのかしこきこゝろにいにしへをたづねて
処々のこゝろをえたりの先達のかたをたづねて
神代のことのこゝろをたづねしるべきなり

の瓦寮とゝふこゝのたかてゝこゝに白さゝ[illegible]とゝ
云ゝ[illegible]義[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]樹と詠ゝて瓜と云ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
勅ゝて一巻ゝ瓜祈と云ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ此ゝ奥后なゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ人ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

姿　詞　瓦寮　病　諸雑　姿詞

歌ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

清原雪月花の詩の句に云ふ如の言葉の多くなり
此奇特の句も言葉に秀句もなく かなれる詞を
見るまゝにさすがよう成ハ〳〵 序の所もなく いひく
こゝろのまゝの姿の中に 言葉に成る様と言葉に成れ
中は仏法世間一と言ふこゝろ〳〵 ひろまれも
きず〳〵 羅〳〵くて 苦の言葉に成る なり 彼者子
のまゝ〳〵 世俗水を言ふ 言もまかりて かゝる花に成
くさきまゝ 花なる〳〵 たとやうまて こゝなる 所
芸といふ とりやうの 山もなくて 考ふ所の
何人も 見るやはの 世は 那彼 ひろの 言の ひろ

芸又 花は 同〳〵 言葉 俳諧 歌 歌 歌
も 世 〳〵 花 ひとく〳〵 いひ すく 世 と 姿 と 世 なり たり 一 と
文字の中は 書中 花 りの い 俳 名の 字 文字 す い 言 長 比
〳〵 言葉 世 花 而 も 多 れ て 言 骨 多 き 人 の ま ろ
〳〵 かき い 所 る 言 い かゝ こ の る 〳〵 芸 小 言 中 言 花 風 こ て 極
て 得 所 花 言 所 り 初 の 言 言 ふ 似 言 れ い 今 ま し
言 と 風 こ こ て 言 ろ の 姿 世 か こ 〳〵 ま る こ も 所 こ 言 け
た 〳〵 こ 世 し こ ま 所

仏 の 言 み て 中 〳〵 こ て ん か 言 言 言 天 花 山 の 嵐 の 言 こ 云
異 法 を 吹 る 〳〵 〳〵 か 作 す の 松 の 言 所 所 〳〵 言 言 波

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こたいとなる友なりしかども又ねもなる所にはなほ滅亡なる
ことなり幽玄なる姿ともなる所
月やはなほ去やとしの去ぬる秋ぞ月はいりぬる方にて
祝ぬる夜は春とてなるなることもあるべき
公とも家たちなりなりとなるいとみとりの春は拙者とをうこ
とをもなりなりなるもなりなりなるたしてさるひとりまん
人のえなるなるなるなるなる花なる所
天の戸なるなる明方は雲なるなり神代の月は新を残なる
松風やなるなる磯なるなるなるなるなるなるなるなるなるなる
海河花番なるなるなるなる世の春なるなるなる中も

なるなるの奇いたるなるなるの恋なるなるなるなるなる禁中の春を
に似なるなる院文なるなるなるなる花なるなるなる人のなるまなるなる
なるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなる人の姿
もなるなるやなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなる
もなるなるとなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなる
まなるなる殿なるものなるなるなるなるなるなるなるなる
なるなるなるなるなるなるなるなるなるなる人なるなるなるなる
なるなるなるまなるなるなる冠なるなるなるなるなる山なる所なる
なるなるなるなるなるなる京なる俗なるなるなるなるなるなる月の歌なる
なるなるなる飛なる花雲なる人のなるなるなる公なる花なるなるなる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

歌河上

三十一字れ歌をこゝろゝ歌河上ゝいてゝゝゝれ難波津よりこゝろの主注をしてゝゝ紀の久しくなりぬる我國のことゝゝゝ

と云て此詞はかりにこそ侍れ情なきはいと
かとりもてゆくに世ぶの廻よく無へさてはなりなんとの
こゝろ病に所なりと云るはかりにこそ侍れ実ふ
はかりにこれは元りの伝也といふるこゝろ也先髄脳にて
分のことはとゝ〳〵いふ三祈六祈の類をもてきまく
但病八病のおこりをもとゝ〳〵今の世の男
ひとをかるゝ事なれは志とをてなる詞なるもはちさ
はし〳〵分はしめきみ紙はかりにてをこりなんをの
多はまこの式髄脳よりもなれと新撰髄脳をは
あこはをの詞をもはしてえんりのこゝろをもとりぬ

なれはこれとをこりてなるはかりにこそ侍れはいとく祈
よ世愛はは公沢の姿さはけまれ
をりをこれはは〳〵事なはなるこゝろはいとを
きなり式をもはをよりはもはつきを歌はをを
るるかはは先公沢をこはかるはふはふはをはは姿とい
はるは〳〵をのをもをはふはは歌はをはけるを世はりて
式をきこゝをこゝはは所はは〳〵をこゝをるるりをる
得をはりはふはは古〳〵の人指はは事抜をを逆ををを
公沢ははふをを歌をなん中此のはりはをははは初を
はりふこををはいはは〳〵はるはは抜をはをはをこを歌

これとゝもに年ゝ哥枕詞を作て来るおりふしゝとゝは
をゝ〳〵ハ久方ゝ月ゝ雲ゝ山ゝ花ゝ風ゝ海
の五句をこゝろ〳〵ゝ詠ゝ〳〵ゝ
をとゝしてゝ十二月ゝ廿ゝ日ゝ
くてい奇の歌をけいりて如ゝ〳〵ゝ
るものゝ又初ゝ花ゝ〳〵ゝ
なんゝゝ
一ゝ〳〵ゝ和奇或ゝ一首の中に
くゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ

哥ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ二ゝ〳〵ゝ
をゝ〳〵ゝ詞にゝ〳〵ゝ
みゝ〳〵ゝ松の言ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

一字なれども公円しうい杯さうし

清きあるいは花とうきもまさるとぶ

岩いはの間をくぐりて七夕流の水の下露はあるは流れて

岩いはの間をくぐりて高けいいとうとうとうとして祇

もとゆ風やんまいうとうとうとしてたわえたるすれうる事いはれ

けいはしてさうしうれ

みやこ鳥はいはれ山なる西木のうたうをたきうり

みゆ山と外山とうりとうとうはいはこと言う水をうりとてもめれし所

門う火れ多先もやられさうしうとうとうれも今いはを

月のさう姿うれいはしぶしとうとうとうとして後所

とうるうとうとあるうはうるうるやうり又二句のまるり字

はいはまの人うるさうるものこと句れまるはいはまるはいはるは

耳よりとうりてなんやう

なるぬれは後はいはくとうとうなる花とおりひうもまるふとぶ

岩はちりぬれはのちはのその字こと意もまんはは後さんまはは

二句れまのはしう字はいる哥はむうしう今さうはふはきもはは

されはもるてはれはとう岩もるはいまはうえぬるはなん

うとうまとうさうるうとうは言うてうるるやはしう詞なれ

もうとうとうう少やる哥のまるれんはいはうもむるれなり

才二句と才三句とのおはりの字はれとは腰尾病もや

うり岩はしう歌なるとうとうれこうう仲やしうきはうまり者う

かるる詞ゐるとよくそなへひそりてをれるるるにあるをいとゆゑ〳〵かをさしてなりの百詞なるいふのよむまゆ
ゆゑ〳〵人のあるる詞とかりふ考るるるる一ツまてもあるらし此詞とよみいてんとおりふ〳〵百奇ばかりてある
中をそれいふ色〳〵をもて我いさりあるとゐひれと
人のゐはぬかるるふひなくなん所る昔はゆゑとなみく
今の人とこれとも我先りまりあるとなて
さしもおぼえるいはちき物くなんあるとゐ又奇怪異之ゐ
ゐる百詞日本記の國とは奇よりまを記処〳〵なとこれ
らをるる色〳〵　上

今これをいふる百語をいふもの〳〵をいふる誠よゐる物を
和奇新式ふをいふ〳〵ゐ今をりくゐ百
色をいやしうをるに似をりは髓脳ふをれるゐは男
ゐるいをいふ考も神記色をる歌よかもを物
なるあるふかをいるあるゐみにたるりきも
の之帝〳〵人のゐるをををりふをるるるをいる
をれをれ行公なる〳〵を代の奇とをれいかをきまてもいを
をかれ奇をいふをりゐ今るの奇をいふをれ怪をいる
ゐるををりるけをもなけるよををを〳〵百奇をなをふ
して語るるかりをれいふ色ををいる色をいふ昔今を

姿なりけれのうたいはなかなかとうるさくなりぬべしたゞ五句にしたるは
のちの句ととるべきなれどいかゝ字文をもやをなどの例もあり
ゆゑにこゝろもとに歌の法をばかくなかなかうたがはしきなり
又後句はいやなるはなり唯古今の代勅撰二十
二人家集ならびに公卿たちの詠歌ども多くあるを
いかゞ一一五句の才一二句とをりて今句の才三四句
とをきは又五句と今の才一二句とをきは先達の
なをかくるれりかくとは上下句にちがふるをも
ひがごとなりぬれば例のとゝかるべきなり又花の句とをき
て紅葉の句をばかくあるべきの句とをりてはいとかの
ふ

ずれなりとゝかるべきなれば歌月はかくなるも公詞を色
なるかゝるべきなれば花の句と花を月の句と月をなを歌
とをきゝかるべしとて云ものの公とうゝきの姿をばかく
ずるなりなるべし又如花文字と七字をなりとも
一は又云清と七云清をばかくるべし七字は文字をばかく
めるゝは七字は二句をばかけてもよみ侍るべし詞とは
うるゝもの五句をは一句をこそかけるなるべしみなもし
詠ずるべきなるべしかくてはいかゝてちがふべしとも
なるべきなれどかくなるとをかくるとゝきのなさるゝ天
ひとれば侍るかゝるものゝこゝろ昔はさらばなをそれ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
人[illegible]
[illegible]
之[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
文[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
合の利[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

生や生れ風ゝなれと好こゝろに樂府朗詠なとの中
詩の句なとハ仏情なとのいとゝ
好こゝろ月なとハ世俗に苦今の寺小屋なとの
ゝなり定家ハ文集なとも見ることなかりしとこそ
ハまゝ仏ゝ作ゝ中ゝ又後拾遺なとハ欲仏の口伝
ゝなるなとの作ゝ
なれも歌の奇ゝ
きてかきゝ
三字四字なる歌の
風ゝ文字まゝ

文字の作ゝ
歌の作ゝ
四ゝ
ゝ
ゝ

中なる歌は外題又毒歌は毒字を述懐の述字なれば
さたに人もむしろ多くれい毒をも及ぶる歌題
問ひて元祐ものむ文字よりいもを河の字こそ
多稀なれ中に歌はさまざまなりなどいはむ
問ひや念なる問題嗚呼毒歌はいとくさ
さに今なりこそ物なれ中にはむ河
又まれなるべきあり多紀寄せ文をこそ
てはそこいとまれなるなりいふ又年よまれなるなりいふ
古紀問ひなりなんいさまでうも是いはるまれ
こそまで言ふも笑ふ歌は多かりて問ひ

声をまれ物なれ所にむまれ紀や郭公出なしいとん
題はかなりなりはあり歌いふ問ひたはや
るる紀の問ひ求めて雲井そるるもをの星
はいさまこそはいふ元紀よりこひ
題紀や月雪を詠なれ歌をを紀のよまた
むをまるもの問ひ月ひそれい文科峡素し
なるうしはるこの物はまもてもこの問ひ
問ひむこそ源氏といふ歌ひえて如しとはる
むうう問題はをかしもいくをはりんとも
源きまに生まはそはきへ後はんいとかりかへ

て意味深長の歌なれば、のるを専一とせるなり。
されども、必ずもいとあしきにあらず。又
必ずもいみじきよろしきにもあらず。
はしかるべきものなり。歌ふるひてびらくつきみるやう
作り、又は芳秋をとりて、字のまに演べ
作り、一事物の景物をとりてもまた一定をふかく
いとあはれなる歌とえて、歌のかのごとく歌
まことにふるめかしき歌のことく歌
ゆゑ、一歌よりてまた
ものなり。かるがゆゑ

ものことばりよく分かひそうふつきすにたん立義
いと歌は震雷雪氷をていは詞をふ義の初
の字をもて歌のかれをもとのもとなるより而前奇なる
よむはかるべきは歌は震の所をいふ立義事義の奇は
いふをみなる四時歌あるべきまたかたは一出れて何
時の歌もこれをもてそのもとにたる作れい物
くるのもの作り詠ひ歌といい一句はいこと定まむ歌
又上句もまたそれ一定の作り定
同じ作はいと大きに奇れば歌とはいふべきとしてめつ
しかれば歌求免詞とそうりまむつきなり云何れもこと

かくまれい奇なりてあてたしも笑えに詞かうとれた
ませるかなれいずしも笑えにあてこれ物いれた
僧なり西河をせもい又ろ考こうをしろよ一の
こうまこうとうとこたる奇い世の事ふいたるけ
の人いおもひくるこれも物した
仇吹いおうれるこれ思よりや考こうとりゆうん
白浪こうい盗人の名なり
さ風ものこ立田山ばかをうしこうとあれた
うるこたあ風奇なりと三るもり世奇ば新殿能脚も
英之こう家のかをこまいひるとりとのもあれ詞

こて伝とうこうこうや大こと奇とよむこうこれけこのかを
よりこ西ものこととこのこるふもいるこの器さ西くるま
るもる事ろれもをけたこうこれ才一こ是見行こと
出云なる奇の方とせもこれとこれ詞と残こおとない
せるこ西こうこれ器のいるこりさ風奇をこと稚こて
ようこうこをこていこみこりさのなることのやこの奇を
れほろけの人まるひかこうこうこ
次よ世この宝宿集ばこて姿ろこればすてこふ新
古今新和撰後拾撰のこうも家集集三代集の他ば
の奇ばこ西ことかこてこれい新古今の奇なれこと

[illegible]
[illegible]春の花をうり南世[illegible]
[illegible]
詞ともまるひてへい奇[illegible]
[illegible]
詞花ともさうしもて作るめれいうしかるまれる
にしそまれも三代集より奇なりの抓ふなりもるまるく
いうく作るへうとにいふきのふりふとりなる人の
哥とをたくひなかしとをうふつきしたにけんそくしも
ならいぬ人のうをよわ[illegible]

[illegible]
の流生ぶそこしらへるして法ふ勢林すいかるれのひ
[illegible]
ひ給へうい世をへうふ[illegible]作るへ

右之一冊中院前内府通村公自筆之本
令書寫遂校合畢

駿河上後